

Fall Out ぽい、世界

無理っす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テンプレの神様転生

事故でなくなった主人公は荒廃した世界に転生されると言われそれがフォールアウトの世界と勝手に勘違いした。

実は似ているようで全く違う世界だった

※注意

原作は一応フォールアウトにしていますが、実際は違います。

更新不定期（主の気分）

気長にやっついていくつもりです。

誤字、脱字、駄文あると思いますが生暖く応援して頂ければとても嬉しいです。
主は豆腐メンタル

目次

E P 1 別世界	E P 0 轉生
—	—
8	1

Ep 0 転生

「ああ、疲れた。」

俺はある会社員（社畜）27才独身

現在久々の休みで自宅にて久々にゲームに勤しんでいた。

やっていたゲームは「フォールアウト4」だ。いぶ前に発売されたゲームで久々のフォールアウトシリーズのナンバリング作品だ

今更、なんでやっているかって？

社畜には時間が無いんだよ（怒）

「もう0時か…。そう言えば、飯まだだったなあ。」

思いついた様に腰を上げ冷蔵庫へ向かう

「げっ!? なんも無いじゃねえか!…。しゃーねえ吉〇家にも行くか。」

冷蔵庫にビールしかなく食べ物が全くとって良い程無かった

仕方無しに財布と携帯、鍵を持って自宅のポロアパートを出る

「明日も仕事か。かつたり。」

ぶらぶらと上の空で夜道を歩く

しかし、これが行けなかった

《パパー……!!》

クラクションの様な音がなりそちらを向くとトラックが猛スピードで突っ込んで来た

—————

「うわあああああ!? つてあれ?」

気がつけば見た事無い真っ白い空間にいた

「なんここ? 俺確かトラックに引かれて…」

「ここは、転生の間、貴方は不幸な事故に合い亡くなりました

!」

(なんだ直接頭に声が聞こえる)

とりあえず周りを見回すが何もいない

「なんだ… 気のせいかな。」

「気のせいではありません

!!」

某スニーキングアクションゲームの敵兵士がスークを見つけた効果音が出るくらいびつくりする

「なんだこの声、直接脳内に… 周りは誰もいないのに…」

ー私は貴方の目の前に居ますよ？

そう言われて前方に目を凝らすと白いもやの様なものがある

(白い空間に白いもやってカモフラ率高けーなおい)

ーまあ、確かに見えにくいのは認めます。

「!?… 考えている事が分かるのか？」

ーそれは、そうですね。私は貴方方人間の言うところの”神”の様な存在ですから

「……は？」

(神？神だど!?英語でいうGODか!?)

ーはい。その神です。

主人公混乱中&神(自称) 説明中—————

「なるほど… 大体把握した。つまり貴方は神なんだな？」

ーですからさつきから言っているではありませんか…

(どうやらこの目の前にいる白いもやの様な物……略して白もやは、神(自称)らしい)

―自称じゃありません!?

「コイツ直接脳内に……」

―それさつきも言っていましたよ? 言いたいだけでしょ!

「バルたか。」

―お巫山戯はこれぐらいにして、何故貴方がここにいるか説明しましょう。

神説明中――

―という訳です

「大体把握した。つまり俺は死ぬはずではなかったが死んでしまったから転生させると。」

―はい。しかし、元の世界は無理なので別の世界になります。

「因みに転生する世界はどんなところ?」

―科学技術が発展した世界でしたが、ある事が契機となり荒廃した世界です。

(荒廃……あることが契機……フォールアウトの世界なのか? 死ぬ前にフォールアウト

4をやっていたのが、原因か?)

「大体分かった。」

「では転生前に特典を選んで下さい。」

(特典、特典ねえ…)

「質問いいか？」

「なんででしょう？」

「その特典とやらはアイテムとかでもいいのか？それと幾つまでok？」

「アイテムでも構いません。そして特典は5つまでです。」

「よし。じゃあアイテムを2つくれ。1つは“ピップボーイ”、もう1つは“ソリッドアイ”をくれ。」

「“ピップボーイ”と“ソリッドアイ”ですか？」

「そうそう。ピップボーイはフォールアウトに出てくる小型端末で左腕に取り付けられる奴で、ソリッドアイはメタルギアソリッド4に出てくる左目に付ける眼帯型機器だ。ああ、それとピップボーイの情報等はソリッドアイで見られる様にして欲しいのと、ピップボーイには同じくフォールアウトに出てくるワークベンチや武器作業台、防具作業台等の機能と武器等を購入できるショップ機能を取り付けてくれ。」

「…分かりました。」

「次に戦闘スキルをくれ。具体的には“ビックボス”並にしてくれ。」

「ビックボス?」

「メタルギアソリッドに出てくる人物だよ。」

「分かりました。」

「あとはその世界の物資と技術スキルくれ。」

「分かりました。物資はそのピップボーイとやらに入れて置きます。」

「では最後になりますが、職業を決めて下さい。」

「…え?」

(職業? なんのこっちゃ?! フォールアウトにそんな設定あったっけ? …… まあいいや。)

「職業はこの中から選んで下さい。」

目の前にコンソールの様な物が現れる

(うわく色々あるなあ… 運び屋、傭兵、農民、勇者、商人 e t c e t c …… 多すぎる。…… これであっか。)

気に入った奴があったので、コンソールをタッチする

「これで全ての手続きが終了しました。では来世でも頑張ってください。」

徐々に意識が薄れていく

俺は抵抗すること無く意識を手放した。

う
う
う
う
...

E P 1 別世界

「あぢい〜」

某ゴムゴムの実を食べた少年が砂漠で吐いていたのと同じ弱音を吐きながら絶賛徒歩で移動中…

あれから、別世界へ転生された俺はなんと荒野のど真ん中に転生された

「普通、荒廃のド真ん中に放り出すか？どんなRPGでも初心者の街的などころの近くから始めるだろ…」

ボヤきながらとりあえず日差しが遮れそうな場所に移動している

ピップボーイの地図を見るとココから数キロ進んだ先に、街ぽいのが見えたのでその方角目指して徒歩で移動、自動車通勤してたりーマンにキツイ☆

しばらく歩くともまだ街まで着いてないが大きな岩場があったので一休みついでにピップボーイの確認を始めた

まずは定番SPECIALLの確認…をしようとした。

SPECIALLとはフォールアウトにおいての基本アビリティでポイントを割り振る事により能力が変わり、さらにPARKSと呼ばれるスキルに派生するのだが…何

故かピップボーイにはSPECIALやPARKSは無く代わりにレベルとアビリティ的な何かがあった。

????

職業：BOSS

L v. 1

力：50

耐久：1

器用：94

俊敏：78

射撃：89

近接：74

魔力：0

技術：99999999

カリスマ：10000

スキル：

・BIG BOSS

EX

S

B B A

F B

F C

異世界の英雄の戦闘技術を行使可能。敵がコミュニケーション可能な場合、優れた力

リスマにより味方に引き入れる可能性が高まる

・MAD SCIENTIST

ありとあらゆる技術を行使可能。失われた旧文明の遺産を復元、改造等ができる。

魔法：無し

装備品

頭：無し

胴：シヤツ

腕：無し

足：チノパンツ スニーカー

「技術は俺が頼んだからいいとして…魔法って何さ…」

そう呟いた俺は悪く無い。

だってフオールアウトの世界でしょ？

銃とか近接武器主体じゃないの？

一通り考えた挙句とりあえず放置して他の確認を進めた。

決して現実逃避した訳ではないからね！

—————

次に確認したのは所持アイテムである。

アイテム欄には……

アイテム：

ワークベンチ

武器作業台

防具作業台

ケミストリーステーション

クッキングステーション

パワーアーマーステーション

ロボットステーション

ソリッドアイ

「白もやの奴、ピップボーイに機能を付けてと説明したのに作業台丸々突っ込んでやる……さては面倒くさがったな？」

「ん？待てよ……武器が一つも無いじゃねーか！某RPGでもヒノキの棒と鍋の蓋はくれるのにアフターサービスわりーなおい！」

とりあえずソリッドアイをだし左目に装着した。

次に武器を手に入れる為、ショップを選択した。

しかし、ここでアクシデントが起こる。

「買えねーじゃねえか!？」

武器の購入が出来ずにいた。

ヘルプによると敵を倒したりするとポイントが入りそのポイント分だけ武器を
購入出来るようになるらしい。

つまり、最初は丸腰で敵を倒せと言っているのだ。

それなんて無理ゲー？

仕方無しに次にピップボーイに資源の欄を確認すると見るのも面倒な数の各種資源
がズラリとあった

「鉄や木材とかは分かるが、ウランやらパラジウムは何なんですかねく…ん？まてよ
？資源はあるからこれで武器作れんじゃね？」

確認すると武器の制作は可能だった。

「まあとりあえずこの資源で取り敢えず武器を作りますか。」

武器作業台と防具作業台を出し制作に取り掛かる。

武器作業台につくとメニューが目の前に現れた。

メニューを見ると自分の世界の武器から見たことも無い武器までズラリと並んでい
た。

「とりあえずハンドガンを作るか。： スーパークが使っていた武器は。： つとあったあつたガバメント。」

ガバメントとは大戦中にアメリカ軍で使用された傑作自動拳銃の事である。

正式名はコルトM1911A1といい。

軍からの「1発でも、敵の動きを止められるだけの威力がほしい」という要望に基づき、ジョン・ブローニングが考案した、45ACP（45 Auto Colt Pistol）という大口径弾を使用する拳銃で、そのストッピング・パワーの高さから信頼され長年アメリカ軍の第1線で活躍し続けた。

装弾数はシングル・コラム・マガジンによる7+1発である。

メニューのガバメントを選択すると勝手に手が動きあつという間に完成した。

「たしか武器作業はアタッチメントも作れたよな？ 武器改造が。： あつた！バレルはネジ切りしてサプレッサーを付けられるようにして。：」

とりあえず諸々の改造を施し弾丸と予備マガジンやサプレッサーを作りハンドガンの作成を終えた。

鏡の様に磨き抜かれたファイリングランプ、強化スライドだ的なネタは割愛（笑）

「結構、資源使ったな。： あまり効率的では無いし元々資源は兵器や拠点を作るために

貰った物だしあんまり使いたくねえな。早めにシヨップを使えるようにしないと…」

資源で武器制作する場合、かなりの資源を使うので極力使用は控えたい

サブアームは作ったので次にメインアームを作る。

最初はM4系列にしようと思ったが、荒野が続くこの環境には相性が悪いと思ったのでAKシリーズを制作する事にした。

作ったのはハンガリーで作られたAKの派生系AMD-65である。

少しカスタムしてあの頼りないハリガネストックは外し代わりにしつかりとしたストックに変更、マガジン装填の邪魔になるフォアグリップは外して代わりに20mmレールを取り付けデルタタイプグリップに変更、更に上部にも20mmレールを付けEotacのホロサイトを取り付けた。

「あとは、近接様にナイフを作って武器はOKだな。防具は…砂漠タイプデジタル迷彩AOR-1のBDU上下と…弾倉ポーチ付きのタクティカルベストと…タンカラーのブーツと…ヘルメットは邪魔だからAOR-1のベースボールキャップでいいや。」

装備を一通り装着して準備が完了した。

ハンドガンのホルスターは作らないのかって？ピップポイの武器お気に入りしたらホルスターは要らないんだよ（笑）

「つともう暗くなっているな… 早めに寝るか…」

作業台を仕舞いワークベンチで寝袋を作り早めに寝ることにした。

「明日は街まで行くか… そうすりゃ人ぐらいいるだろ。」

この時はまだ自覚が無かった。

ここが荒廃している世界だと言うことに…

つづく…